

教養教育改革案が出されました

教養教育改革検討会議では、平成26年1月から9月にかけて8回の会議を開催し、第4回会議からはWG（小川、駒谷、西村、三成、渡邊）に具体的な原案作成を委嘱して、WGと検討会議での議論を重ねました。その結果、以下のような教養教育改革案を決定し、9月2日に学長に答申しました。学長からは、この改革案を教育計画室に提案し、実施に向けた具体的な検討に入るように指示がありました（新組織についてのみ、今後執行部で検討するので現時点では保留、とされています）。

（骨子）

1. 現行の教養科目の大幅見直しと再編成の必要性
2. 本学の教養教育の理念：「奈良女子大学的教養——5つの問いと7つのアプローチ」
3. 新入生全員が履修する「パサージュ」（ミニゼミ）
4. 「教養コア科目」＋「サテライト科目」群
5. 教養教育の企画、運営、評価に責任をもつ新組織の創設

※ その後、教育計画室では教養教育部門と教養教育改革検討会議WGとの合同ミーティングをもち、実施に向けて次のようなスケジュールが示されています。

- ・平成26年度中に、新理念に基づくカリキュラム全体案の検討を行なう。科目の見直し作業は、各科目の開講担当ないし窓口となっている学科、コース等と相談しつつ26年度中に完了し、新カリキュラムは28年度4月より実施する。
- ・新設科目「パサージュ」と「教養コア科目」は、27年度は現行カリキュラムの中に一科目として位置づけて、試行および一部実施。28年度から新カリキュラムとして全面实施。
- ・27年度に試行、一部実施する「パサージュ」と「教養コア科目」については、準備や実施状況の記録と総括、評価を全学にフィードバックして、次年度の全面实施に向けた参考とする。

1. 現行の教養科目の大幅見直しと再編成の必要性

見直しの必要性：これまで長年にわたって教養教育科目の組織的・体系的な検討が十分に行われていなかった。その結果、次のような問題点が生じていた。

- 1) 教養教育の体系的ヴィジョンの欠如。
- 2) 時代の変化と学生のニーズに応じた新しい科目設置の必要性に対応できていない。
- 3) 特に、かつての4単位科目が機械的に2単位2科目に分割された結果、内容に重複が生じている。

見直しの原則：スクラップ・アンド・ビルド

- ・新設科目を作る際には、相応数の既存科目を削減する。授業負担の純増はできる限り回避する。
- ・内容が重複している科目の統合・削減を行う。

かつての4単位科目が分割されている科目に関して、担当学科等に統合・削減の可能性を検討していただく。統合・削減する場合、専任教員担当の科目については、来年度は「開講せず」とする。非常勤教員担当科目については、来年度は従来通り開講。平成28年度より、統合・削減後の新カリキュラムとする（非常勤科目も削減）。

- ・統合・削減によって生じた「資源」を新設科目に充てる。
- ・週2回開講し半期で集中的に授業を行う（4学期制的な）開講形態の導入を検討する。

2. 本学の教養教育の理念：「奈良女子大学的教養——5つの問いと7つのアプローチ」

(以下、この項は学生向けの言葉として書かれています。)

奈良女子大学によろこそ。

大学が「大学」である所以の一つは、高度な専門研究・教育と共に教養教育にあります。では「教養」とは何でしょうか。

よくある誤解は、幅広い知識や常識、というものです。たしかに知識は大切です。しかし死んだ知識をいくらたくさん持っても、それは教養ではありません。では、「生きた」知とは何でしょうか。

実はこれは今、日本中の大学で問い直されている問題なのです。私たちの奈良女子大学では、「奈良女子大学的教養」を取って以下のような5つの問いのかたちで皆さんに提起したいと思います。これらの問いを自ら考え、共に実践すること、それ自体が教養教育であり、その結果、皆さんの身についたものが「教養」である、と私たちは考えます。

5つの問い——

1. 大学ならではの学びとは何ですか？ [大学]
2. 女性ならではの知というのはありますか？ [女子]
3. 奈良で学ぶことを通じてあなたは世界にどんな貢献ができますか？ [奈良、グローバル]
4. 大学で学ぶことはあなたと未来の世代の人たちにとってどんな意味がありますか？ [次世代育成、未来]
5. あなたがよく生きるために必要な知と技（わざ）は何ですか？ [価値、モラル、知識、スキル]

これら5つの問いを皆さんが考え、実践するために、奈良女子大学の教養教育で私たちが重視しているのは、次の7つのアプローチです。

7つのアプローチ——

1. 知の創造に参加する
大学は知の創造の場であり、奈良女子大学の教員は一人ひとりが第一線の研究者です。教養教育においても、多様な分野の教員の研究の最先端に触れることを通じて学びます。
2. 社会的実践に飛び込む
大学の知は社会の現実と切り結ぶ中で創造されます。社会は豊かな学びの源泉でもあります。仲間と共に社会的な問題の解決に取り組む実践を通じて、学びの意味を認識し、実感できることを重視します。
3. 本物に触れる
奈良は様々な「本物の」文化財や出来事に接する機会に恵まれた地です。大学でも、本物のモノや人や古典に触れることを通じて学びます。
4. 背伸びする
大学の授業は、受け身で知識を与えてもらう場ではありません。教師が取って教えず、学生が少し背伸びして、自ら行動し、調べ、考え、気づくことを大切にします。また、そのために自らの生活と学びを設計し、管理するトレーニングを行ないます。
5. しっかり書く
よく生きるためには、物事を論理的に、そして深く考えることが必要です。言葉を正確に読み取り、聞き取り、的確に要約して書くトレーニングを徹底的に行なうことを通じて、タフで懐の深い思考の力を養います。

6. 問いをあたためる

学問研究の対象も社会的現実も、簡単に短絡的に捉えることができない複雑さに満ちています。安易に答えに飛びつかず、「正しさ」を疑い、問いを持ちこたえ、あたためることを大切に学びます。

7. 他者と学ぶ、他者から学ぶ、他者を学ぶ

様々な「他者」——大学の仲間たち、社会の中で立場や専門や利害を異にする人たち、異なる文化に生きる人たち——と積極的にコミュニケーションし、共に問題解決に取り組む経験を通じて学びます。

以上のような「奈良女子大学的教養」の5つの問いと7つのアプローチは、以下のような教養教育カリキュラムに具体化されています。

- ・ 1回生前期に全ての新生が履修するゼミ「パサージュ」
- ・ 二つの履修パターン+特修プログラム
 - パターンA：自由設計プログラム（従来型）
 - パターンB：教養コア科目プログラム
 - 特修プログラム：女性リーダー育成プログラム

3. 新生全員が履修する「パサージュ」(ミニゼミ)

パサージュ：フランス語で「移行」「街路」（特にパリのアーケード街）の意。
高校から大学への移行路であり、大学の学問のショーケース。

開設趣旨：1回生の最初に大学の「学問」に触れることを目的とする。

専門教育の基礎としてではなく、また単なるスキル習得でもなく、少々難解であっても、大学の学問が高校までの学習と如何に違うのかを体験し、学生に新鮮なインパクトを与えることを主眼とする〔←アプローチ1〕。学びのスキル習得は「大学生活入門」で補う。 ※「大学生活入門」の再編成は検討課題

Cf. 京大の「ポケットゼミ」<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/freshman-guide/pokezemi>

開講内容：各担当教員の専門に即して、大学の「学問」の一端に触れるものとする。

受講生が学部混合で、専門のための基礎でないことを踏まえれば、あとは担当教員の任意。ただし、担当者には事前・事後に打ち合わせ・総括の機会を設定する。

開講形態：1回生前期を前半、後半に分けて、7回（+共通の全体ガイダンス1回）の1単位科目として設定。全員が前半、後半のいずれかで履修する。必修。

そのためには、学部混合の15人程度のパサージュを、前半・後半、各17ずつ開講。

パサージュ選択方法：学生は第3希望まで出して、抽選で人数調整。

授業内容をリストにして配布。学生の選択の資料となると同時に、「奈良女の学問」を一覧できる〔←アプローチ1〕ものとする。

担当教員：概ね各学部から5～6人×2セットずつ担当していただく。前半・後半リピートでも、別の担当者でも可。（博士後期課程の学生を積極的にTAとして登用・活用する。若干数については本学退職教員にお願いすることも検討する。）

時間割：全て横並びではなく、担当教員の都合に合わせて、現在、教養科目が入っているコマに分散させる。過度の重複が生じないように調整措置を講じる。

履修登録上限設定除外、再履修など：この科目は履修登録上限設定から外す。再履修者は2回生以降、第一希望を優先して配属する。

4. 「教養コア科目」+「サテライト科目」群

開設趣旨：上記の「5つの問いと7つのアプローチ」のいずれかを具現化するために、「教養コア科目」と、それに関連する教養科目（および各学部の積極開放科目）を「サテライト科目」としてリストアップして（放送大学も含む）、一つの履修体系ないし科目群の性格をもたせる。

※ それに伴い、28年度入学生からは「主題科目」というフレームを廃止する。

「教養コア科目」の趣旨と開講形態：学部混合の3～5名程度の教員が、単なるオムニバスではなく、専門領域を有機的に関連させるコラボレーションに基づいて授業を作っていく。（担当者は非常勤も含む。）

- ・それぞれの科目が、どの「問い」と「アプローチ」に対応するものかを明示する。
- ・講義のみならず、ゼミや実習、フィールドワーク、反転授業、ディベートなど、多様な学びの方法論〔←7つのアプローチ〕を活用する。
- ・「リーダーシップ」科目と組み合わせ、上回生がファシリテーターとして参加する。
- ・1回生後期（以降）、2単位（ないし、週2コマ開講で4単位）で開講。
- ・3年計画で順次増やして、最終的にはすべての1回生（+α）が少なくとも1科目は受けられる数を開講。ただし、必修とはせず。
- ・1科目80名までの受講者として、全部で6（+1特修）科目開講する。
- ・初回は説明会、相談会にするなど、十分な資料に基づき学生が履修選択できるようにする。
- ・内容や方法のコーディネート、検討はコアグループ（後述）が担当。
- ・一つの科目は原則3年の時限開講として、内容を更新して行く。

「教養コア科目」+「サテライト科目」群の具体例（次年度開講検討中の4科目）

- ・なら学
- ・ジェンダーから見た人間と社会
- ・持続可能な社会のために（放射線の科学と思想）
- ・さらに「特修プログラム：女性リーダー育成プログラム」
コア科目としては「女性リーダーゼミ」。
講義科目の「女性リーダー論」以外の6単位は履修登録上限から外し、定員を超えた場合は選抜を行う。

5. 教養教育の企画、運営、評価に責任をもつ新組織の創設

- ・教養教育改革検討会議を母体に、事務職員、外部人材を加えて、新たに責任組織を設置する。（教育計画室との関係等、組織的位置づけは検討課題。）メンバーは学長指名による。人数は現在の検討会議+α。
- ・その中のコアグループ（現在のWGを母体とする）が実質を担う。任期は原則として3年。（交代方法は検討課題。）

- ・教養教育カリキュラムを固定したものにせず、常に新たに作り続けて行くこと、またその際に、学生と共に学びを設計することを重視する。そのために、学生からフィードバックを受け、教養教育カリキュラムについて意見を聞く場を設定する。

※ 外部人材→ 企業勤務のOG、マスコミ、専門職などから2名（中等教育学校からは既に検討会議に入っている。）

以上

■ 奈良女子大学教育システム研究開発センターニュースレター 36 ■

2014年10月1日発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

住所：〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 204

TEL. : 0742-20-3352

Website : <http://www.nara-wu.ac.jp/crades/>

mail : crades@cc.nara-wu.ac.jp